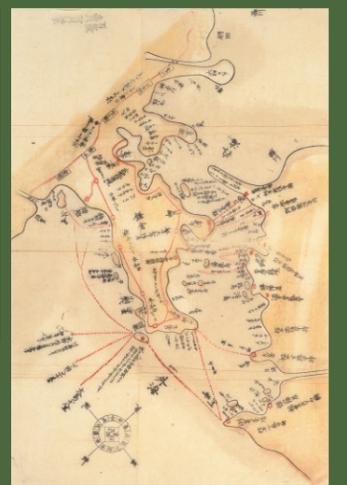


平成25年度 企画展
池田家文庫
絵 図 展

開国と岡山藩



OPEN A COUNTRY
AND OKAYAMA HAN

平成25年度 池田家文庫絵図展「開国と岡山藩」図録 正誤表

頁	番号	箇所	誤	正
6	11	年代	1655年2月7日	1855年2月7日
25	41	解説文 7行目	川勝義邦	勝義邦
26	11	年代	1655年2月7日	1855年2月7日

平成25年度 企画展 池田家文庫絵図展

開国と岡山藩

会期 平成25年11月4日(月・祝)～11月17日(日)

会場 岡山シティミュージアム 4階企画展示室

主催 岡山大学附属図書館、岡山シティミュージアム

後援 岡山県教育委員会・岡山市教育委員会・山陽新聞社・中国新聞備後本社
朝日新聞岡山総局・読売新聞岡山支局・毎日新聞岡山支局
産経新聞岡山支局・NHK岡山放送局・RSK山陽放送・OHK岡山放送
TSCテレビせとうち・KSB瀬戸内海放送・RNC西日本放送

ごあいさつ

岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムは共同で企画展池田家文庫絵図展「開国と岡山藩」を開催いたします。本展覧会は岡山大学と岡山市の文化事業協力協定に基づく事業であり、本年度で9回目の開催となります。

この展覧会は、岡山大学附属図書館が所蔵する池田家文庫を、広く地域の皆様に公開し、親しんでもらおうという趣旨で企画しております。池田家文庫は江戸時代の備前岡山藩池田家の藩政資料ですが、中でも特徴のひとつでもある地図資料「絵図」を中心に展示をしています。

幕末の江戸時代は激動の時代ともよばれ、嘉永6年(1853)浦賀沖へのアメリカ艦隊提督ペリー来航をきっかけに、江戸幕府は「開国」への道を余儀なくされます。

今回は、アメリカ大統領の国書に関して幕府から各藩が意見を求められた際、岡山藩主池田慶政が提出したペリー来航と開国についての意見書や、西洋軍艦が詳細に図解された西洋軍艦図、房総・摂海警備で使用された御台場建築絵図や帳簿等、41点を展示します。様々な資料を通じて、幕末期にまつわる時代の変化を「岡山藩」の動きを通して見ていただきたいと思います。

この池田家文庫絵図展で皆様が、岡山ひいては日本の歴史に興味や関心を抱き、池田家文庫を地域の共有の財産であると感じていただければ、主催者として望外の喜びと存じます。

2013年11月4日

岡山大学附属図書館
館長 沖 陽 子

岡山シティミュージアム
館長 安 富 緑

関連行事 *Event*

オープニングトーク

日時 平成25年11月4日(月・祝) 午前10時～午前10時30分

場所 岡山シティミュージアム 4階展示室

講師 岡山大学大学院教授 倉地克直氏

記念講演会「開国と開港」

日時 平成25年11月9日(土) 午後2時～午後4時

場所 岡山シティミュージアム 4階講義室

講師 東京大学史料編纂所教授 横山伊徳氏

ビブリオバトル

日時 平成25年11月7日(木) 午後4時30分～午後5時15分

場所 ひかりの広場(リットシティビル2階)

内容 岡山大学日本史専攻学生による知的書評合戦

凡例

- 本図録は、岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムが平成25年11月4日(月・祝)～17日(日)まで開催する『企画展 池田家文庫絵図展「開国と岡山藩」』の図録である。
- 展示番号と本書の図版番号、展示資料目録に印した番号は一致する。また表記は図版番号、資料名、年代、池田家文庫整理番号、頁数、法量(タテ×ヨコ、cm)の順に記した。
- 本書に掲載した展示資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像及び岡山シティミュージアムが撮影した画像である。
- 本書の総説・展示資料解説は、岡山大学大学院教授 倉地克直が執筆した。編集は岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムで行った。

平成25年度池田家文庫絵図展「開国と岡山藩」— 解説

目次 Contents

「開国と岡山藩」解説	1
出展資料解説	3
(1)ペリー来航と岡山藩	3
(2)房総警備	8
(3)摂海警衛	14
(4)瀬戸内警備と御台場	17
(5)広がる世界	24
出展資料目録	26
池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録	28

(1)ペリー来航と岡山藩

嘉永6年6月3日(西暦1853年7月8日)、4隻のアメリカ艦隊が浦賀沖に来航した。艦隊の長官はマシュー・カールブレイス=ペリー。アメリカ合衆国大統領フィルモアの親書を携えていた。イギリス・ロシア・アメリカが日本に対して「開国通商」を要求する動きを強めていることは、徳川幕府もオランダから知らされていた。そのため江戸湾などの防備を固めていたが、「鎖国」の「祖法」は堅持する方針であった。しかし、蒸気船2隻を含む「黒船」の威力は圧倒的であった。幕府は評議の末、「祖法」を守るための「権道」(方便)として大統領国書を受領することに決する。ペリーは来年の再来航を予告して離日した。同じ頃、ロシア使節のプチャーチンが長崎に来航し、やはり「通商」を要求している。

当時老中首席として幕府を率いていたのは阿部正弘(伊勢守、備後福山藩主)であった。阿部は幕臣だけでなく諸大名にも国書の内容を公開し、広く意見を求めた。朝廷にもアメリカ船来航を上奏し、国書の和解(日本語訳)を提出した。朝廷・諸大名はじめ国力を結集して事態に対処しようという方針であった。諮問に応じて諸大名から出された意見は、打ち払い論、避戦論、条件付き交易論、開国論など多岐にわたった。岡山藩主池田慶政(松平内蔵頭)も家老などと相談のうえ、「漂流民救助などは人道的に対応するが、交易は拒否し、直ちに防備体制を強める」よう提案した。

次いで慶政は、野田久之介・伊法善助・岡英太郎(のちの香川英五郎)など9名の家臣子弟に西洋流砲術修行のため幕臣の下曾根金三郎に入門するよう命じた。下曾根は開明的な幕閣として知られた筒井政憲の次男で、下曾根家の養子となり、高島秋帆に弟子入りして西洋流砲術を修め、当時は西丸留守居であった。この頃下曾根に入門した家臣たちが、その後の岡山藩の軍制改革を担っていくことになる。

翌嘉永7年1月(1854年2月)に再来日したペリーとの間で横浜において交渉が行われ、3月3日(3月31日)日米和親条約が締結された。他方、下田で交渉が行われていたロシアとの間では、同年(11月27日安政と改元)12月(1855年2月)、日露和親条約が結ばれている。

(2)房総警備

アメリカなどとの和親条約により、下田・函館が新たに開港されることになった。これにともなって幕府は、江戸湾をはじめとした海岸防備体制を一層強化することになる。嘉永6年11月、岡山藩は柳川藩立花氏と相役で安房・上総両国の海岸防備を命じられた。この地は弘化年間以来会津藩と忍藩が防備に当たっていた所であった。12月には安房国平郡32か村、同国安房郡48か村、同国朝夷郡11か村、上総国天羽郡7か村、計98か村、2万9912石7斗3升3合8勺の幕府領が岡山藩の預所とされた。

房総出張を命じられた藩士たちは翌嘉永7年1月に国元を出発、一旦江戸藩邸に集結したのち、3月下旬から任地に赴いた。出張人数は主立った家臣の数で、安房北条が番頭丹羽広人以下126名、上総竹ヶ岡が番頭土肥右近以下70名、中間・小者までを含めると合わせて1100人を超えた。出張の面々に対して藩主慶政は、「異船が来航し、もしも戦闘に及ぶようなときになっても、国元の父母妻子などの心配はせず、家の恥辱とならないように心懸けよ」と発憤を促す直書を遣わした。また、詰場ごとに勤め方の「定」も遣わされた。現地預所の村々からは四季打ち鉄砲(獵師鉄砲)の者が陣屋警備に徴発された。

(3)摂海警衛

安政5年6月19日(1858年7月29日)、日米修好通商条約が調印された。その内容は同年1月にはアメリカ総領事ハリスとの間で合意に達しており、神奈川・長崎・函館・新潟・兵庫および大坂・江戸の開港・開市が含まれていた。こうした状況のなかで、6月15日岡山藩は房総警備の任を解かれて、鳥取藩池田氏・土浦藩土屋氏などの相役で摂海警衛(大坂湾周辺の海岸防備)を命じられた。しかし、岡山藩に兵力の余裕はなく、房総へ出張している家臣らを一旦国元に引き揚げ、改めて軍勢を調べて派遣することとなった。翌安政6年2月には房総持

(1) ペリー来航と岡山藩

場の引渡が終わっている。この年中には大坂に向けて新たに軍勢が送られた。岡山藩の受け持ちは、西宮寄りの矢倉・嶋屋・布屋新田などの台場であった。しかし、周辺に適当な駐屯地がなく、初めは大坂中之島・天満などの蔵屋敷に分散せざるを得なかった。その後、文久元年(1861)6月西成郡川崎村に1万54坪の地所を与えられ、ここに陣屋を築いた。

文久2年(1862)8月岡山藩は鹿児島藩・萩藩同様に国事周旋に当たるべきとの内勅を朝廷から得る。以後京都屋敷に周旋方が置かれ、京都での活動が本格化する。しかし、藩主の慶政はかねてより病気があったため、翌文久3年(1863)2月水戸藩の徳川斉昭の九男九郎麿(のちの茂政)を養子に迎え、家督を譲った。この藩主交代は、江見陽之進・牧野権六郎らの藩内尊王攘夷派の画策によるものであり、茂政の襲封によって藩論は「尊攘翼覇」(天皇の意を奉じ将軍を先頭に攘夷を実現する)に固まったといわれている。

同年5月10日萩藩は下関で外国船に発砲、攘夷の実行に踏み切った。これに対してアメリカ・フランスの軍艦が下関砲台を報復砲撃、フランス軍は砲台を占拠した。またイギリス艦隊は前年の生麦事件の報復として鹿児島を砲撃した(薩英戦争)。このように外国との緊張が高まるなか、7月に岡山藩は摂海警衛の任を解かれ、代わって備中沖・塩飽海の警備と砲台造築を命じられた。なお岡山藩では、引き続き京都での御用が多く藩士を配備する施設が必要なこと、およびこのあたりが遠く250年も前の大坂の陣に際して池田家祖先の利隆が陣を構えた由緒ある地でもあるという理由から、川崎村の陣屋地を引き続き拝領することを願い出て許されている。

(4) 瀬戸内警備と御台場

文久3年(1863)10月朝廷から帰国の暇を賜った茂政は、11月大坂から船で帰国、そのまま備中沖・塩飽海を巡視した。これと前後して岡山藩では、谷田甚太郎らを派遣して砲台建設のための現地見分を行わせた。同じ頃には大砲の鋳造も御野郡南方村で始められた。翌元治元年(1864)4月岡山藩は直島警備に振り替えられ、5月には藩内海岸警備のため児島郡下津井村・田之浦村・胸上村・小串村、邑久郡幸西村などに台場を建設した。これらの台場建設・大砲設置に活躍したのは嘉永6年以来西洋流砲術を学んだ谷田甚太郎らの下級家臣たちであった。同年7月、香川英五郎(のち真一)・谷田甚太郎の両人が「新流大砲御用并大砲隊取立引請」を命ぜられ、8月には新流大砲隊一番手が、9月には新流大砲隊二番手が結成される。当時は古流砲術も併存していたが、これを機に岡山藩の軍事編成は西洋流砲術を中心としたものに次第に移行していくことになる。

他方、陸上交通についても他藩の軍勢などの通行が増加するに従い、岡山藩では城下を通過していた中国路(西国街道・山陽道)を付け替えることを願い出、元治元年4月許可されている。これにより中国路は藤井宿から北上し、牟佐で大川(旭川)を渡り、ほぼ古代の山陽道に沿って西辛川に至る道筋となった。これにともない、備前領内から備中国への出口にあたる辛川村の小丸山に砲台の設置が検討された。実現には至らなかったようだが、海上だけでなく陸上でも領内防備が強く意識されるようになった。

(5) 広がる世界

18世紀後半から蘭学が盛んになったこと、また19世紀になって日本近海に外国船がしきりに渡来するようになっていたことから、外国への関心は広がりつつあったが、「開国」によって西洋諸国をはじめ世界への関心が一挙に高まった。また蝦夷地や千島諸島・樺太などに対する関心も、ロシア船との接触などが風聞として広がるなかで、高まっていった。こうした世界への関心の広がりは、世界地図や北方地図の普及によって確かめることができる。

岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授 倉地克直

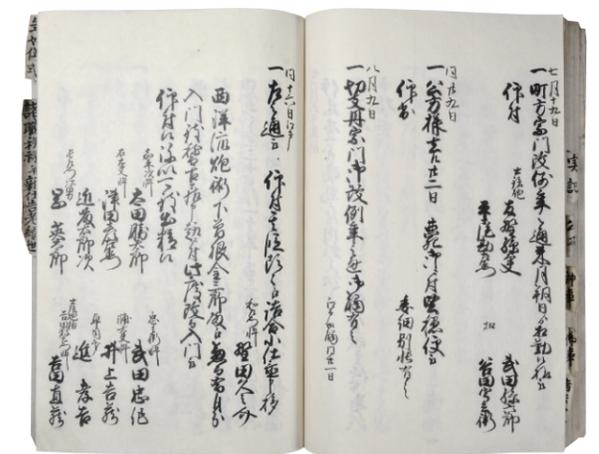
〔参考文献〕

- 『池田家履歴略記・下巻』日本文教出版、1963年
- 大月滋敏「幕末の新往還について」『岡山地方史研究』107号、2005年
- 『岡山県史・近世IV』岡山県、1988年



1 修史草按・史料草按 全20巻／
維新前目次1冊 A7-1~21 24.1×16.5

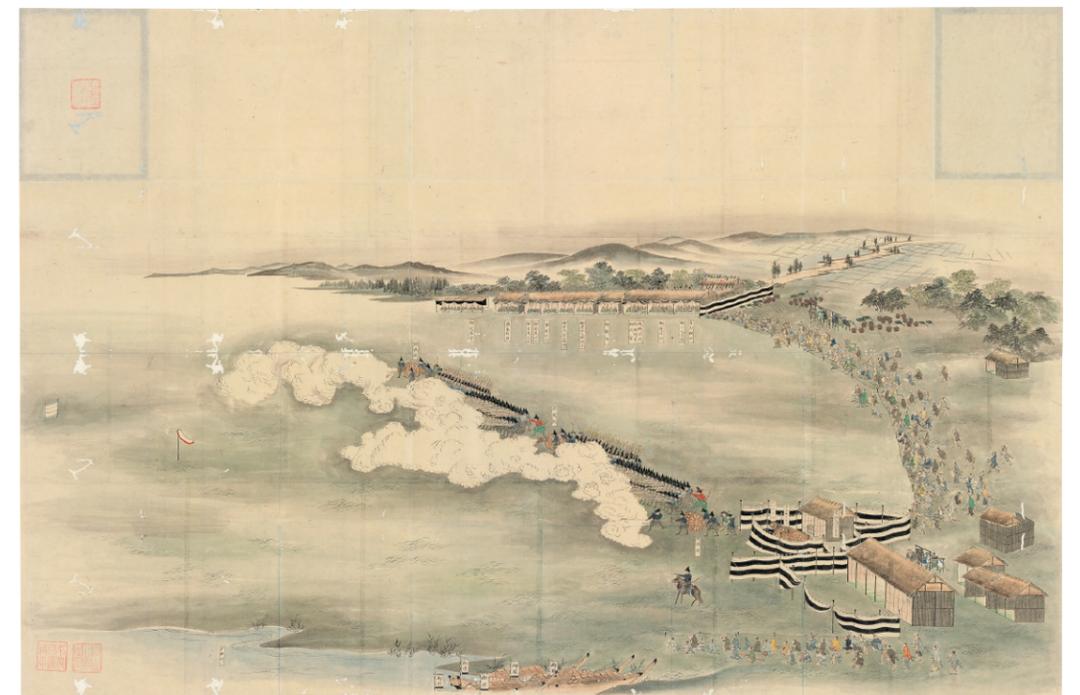
幕末維新期の岡山藩の政治活動を編纂した編年体の史料集成。明治中期に池田家が家史編纂事業の一環として制作した。嘉永6年～慶応3年(1853~67)を全20巻にまとめており、巻1～巻5が修史草按、巻6～巻20が史料草按と題され、維新前目次1冊が付いている。「留帳」ともに幕末期藩政を知る基本資料。



3 嘉永6年留帳・上

嘉永6年(1853) A1-304 1冊 26.8×19.3

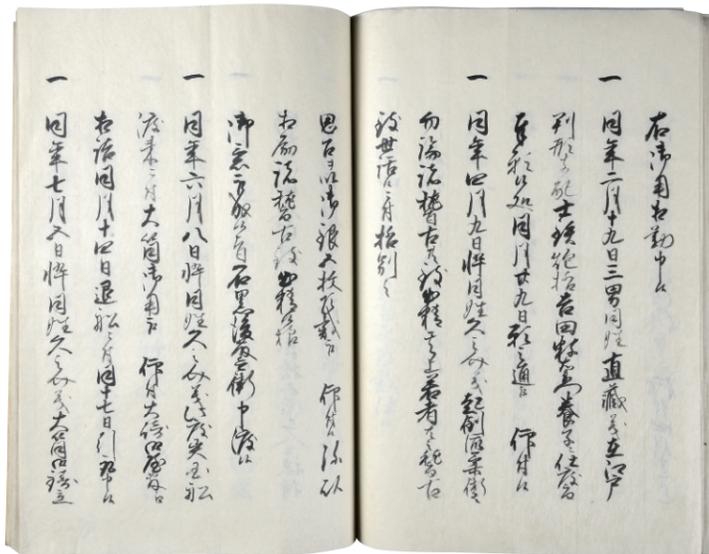
藩の留方が、各部局の記録や文書から行政上必要な事項を書き抜き、1年ごと項目別に編纂した記録。承応3年(1654)から明治27年(1894)まで336冊が残っている。1年1冊が原則だが、嘉永6年は重大事件が多かったため、上下2冊に編集されている。掲示したのは、8月16日に野田久之介ら9名が下曾根金三郎へ入門し西洋流砲術を学ぶことを命じられたことを示す記事。



2 高島砲術訓練之図

T12-117 1枚
105.5×159.2

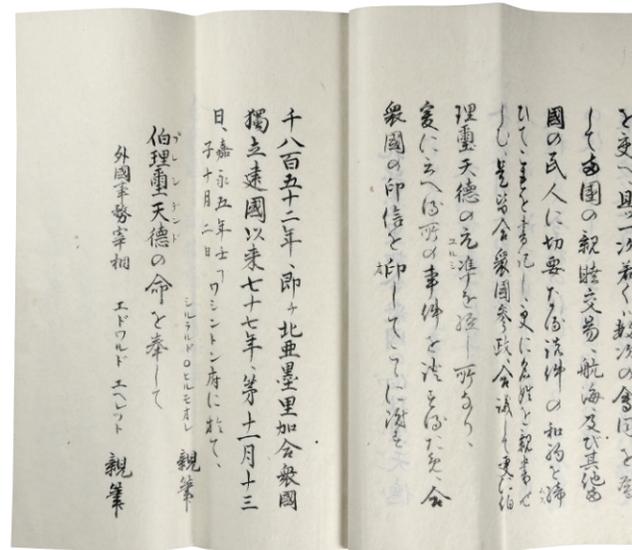
高島流は、長崎の町人高島秋帆が出島のオランダ人から学んで広めた西洋流砲術。天保11年(1840)9月秋帆は西洋流砲術の採用による武備強化を幕府に進言、翌年幕命によって出府して徳丸ヶ原で砲術訓練を行った。本図はその時の様子を描いたものか。この結果、幕府は高島流を採用することとなり、以後各藩でも家臣を秋帆に入門させ、高島流を採用するところが増加した。



4 野田久磨奉公書

D3-2002 1冊 27.8×20.0

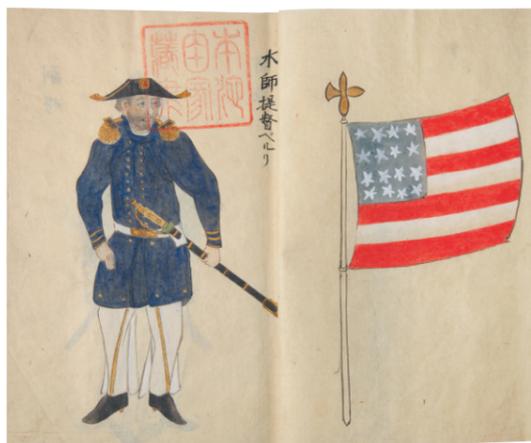
奉公書は、岡山藩が家臣に先祖の由来や代々の勤役などの履歴を書き上げさせて、提出させたもの。池田光政が寛永21年(1644)に「先祖書上」を命じたのが最初で、元禄9年(1696)以降はほぼ5年ごとに書き継がせた。留方が管理し、3423家のもが現存する。野田家は上道郡中野村出身の百姓で、権八郎が寛延3年(1750)に切米30俵3人扶持で召し出された。久之介は天保13年(1842)8月「在江戸通ノ子」に召し出され、嘉永6年(1853)12月に父和左衛門の跡目を相続し、25俵3人扶持を与えられている。



7-1 合衆国伯理璽天徳書簡和解

〔嘉永6年(1853)7月〕
S1-49-1 1冊 26.2×19.7

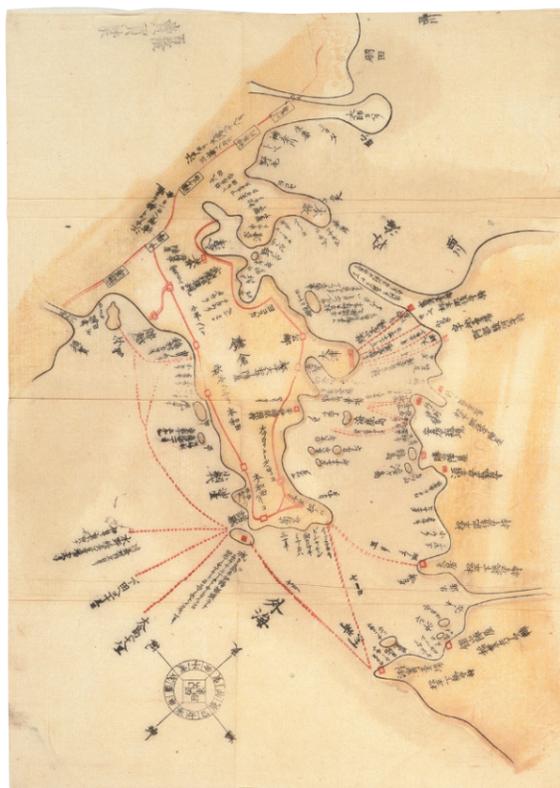
ペリーが手渡したアメリカ合衆国大統領フィルモアの親書・副翰(1852年11月13日付け)、およびペリー自身の上書(1853年7月7日付け)・浦賀での口上書(1853年7月13日)を和訳したもの。



5 北亜米利加水師提督ペリリ上陸之図

P21-67 1冊 19.0×13.4

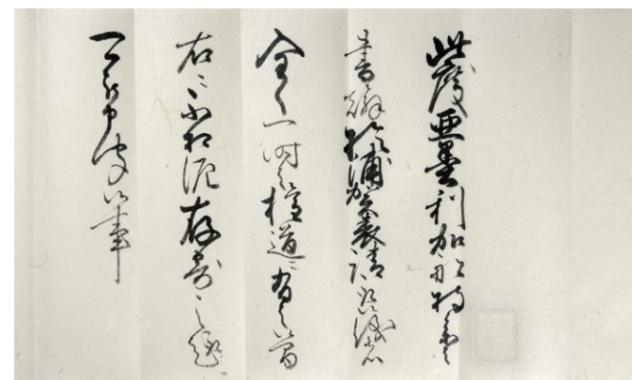
「水師提督ペリリ」以下「副将」「隊長」「楽童子」「伍長」「戦士」「楽師」「ケペール組」「黒人」などの図像が描かれている。巻末には「亜美利加ヨリ献貢物目録」が記されている。



6 浦賀図

〔嘉永6年(1853)カ〕 T12-22 1枚 39.8×28.5

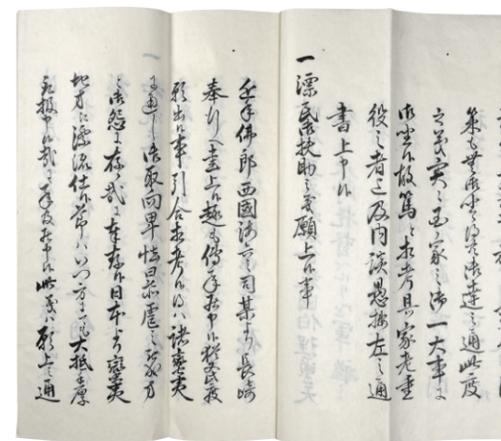
木版彩色、帯封に「浦賀図 全」とある。本紙には「百枚限売買禁」と刷り込まれている。浦賀周辺海域の様子とともに、対岸の房総半島を含めた警備の諸藩の配置も示されている。



7-2 〔阿部伊勢守演達書写〕

〔嘉永6年(1853)7月〕 S1-49-6 2通
16.4×61.4 16.4×31.4

7月朔日月並み出仕した大名および幕臣に対して、アメリカ大統領フィルモアの親書など(7-1)が示され、首席老中阿部伊勢守(正弘)から忌憚なく意見を述べるようにとの演達があった(S1-49-6-1)。追書(S1-49-6-2)では、書簡を受け取ったのは「一時の権道(方便)」だと念を押している。



8-1

8-1 書上 松平内蔵頭

嘉永6年(1853)8月 S3-17-1 1冊 26.7×19.4

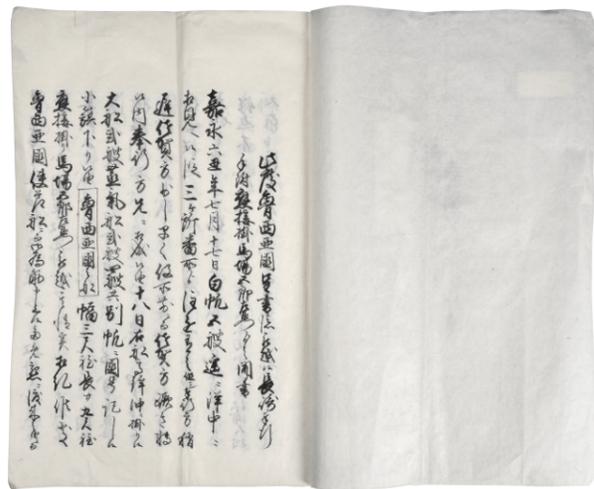
8-2 副啓 松平内蔵頭

〔嘉永6年(1853)8月10日〕 S3-17-2 1通 18.2×107.1

幕府がアメリカ大統領の国書についての意見を求めたのに対して、岡山藩主松平内蔵頭(池田慶政)が提出した意見書(8-1)とその添書(8-2)。一緒に封筒に入れられていた。慶政は、「漂流民救助などは人道的に対応するが、交易は拒否し、直ちに防備体制を強める」よう述べている。こうした意見は諸大名の一般的な反応であった。



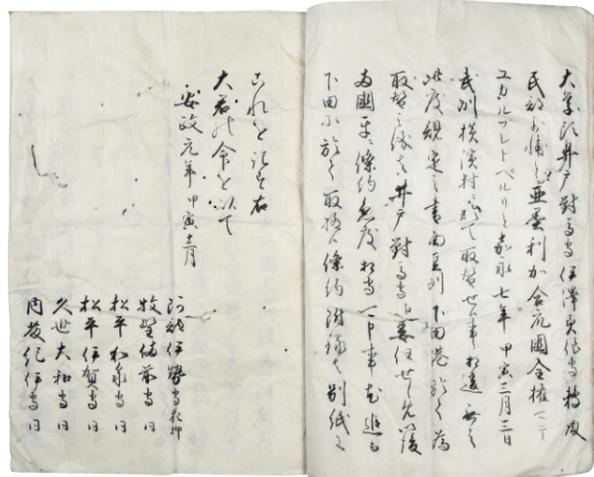
8-2



9 長崎表魯西亜船風説書

〔嘉永6年(1853)〕 S1-46 1冊 28.0×20.4

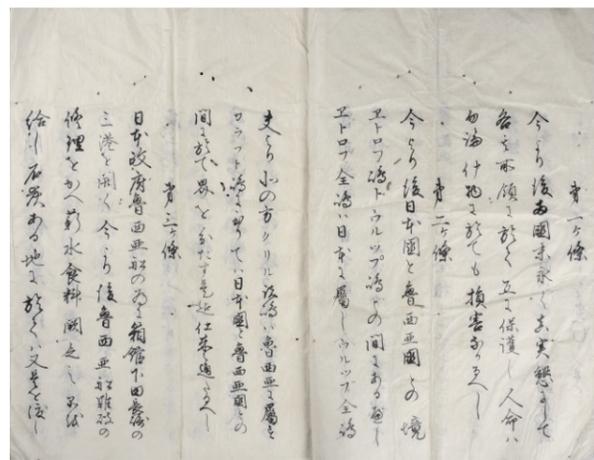
嘉永6年(1853)7月17日にロシア使節プチャーチンが長崎に来航したとき、交渉にあたった長崎奉行手附応接掛馬場五郎左衛門からの聞き書きを写したもの。この時期岡山藩では、幕府と海外使節との交渉の内容をさまざまなルートを通じて収集し、藩論決定のための材料とした。池田家文庫にはそうした記録が多数残されている。



10 亜墨利加約條

安政元年12月 S6-315 1冊 26.7×19.4

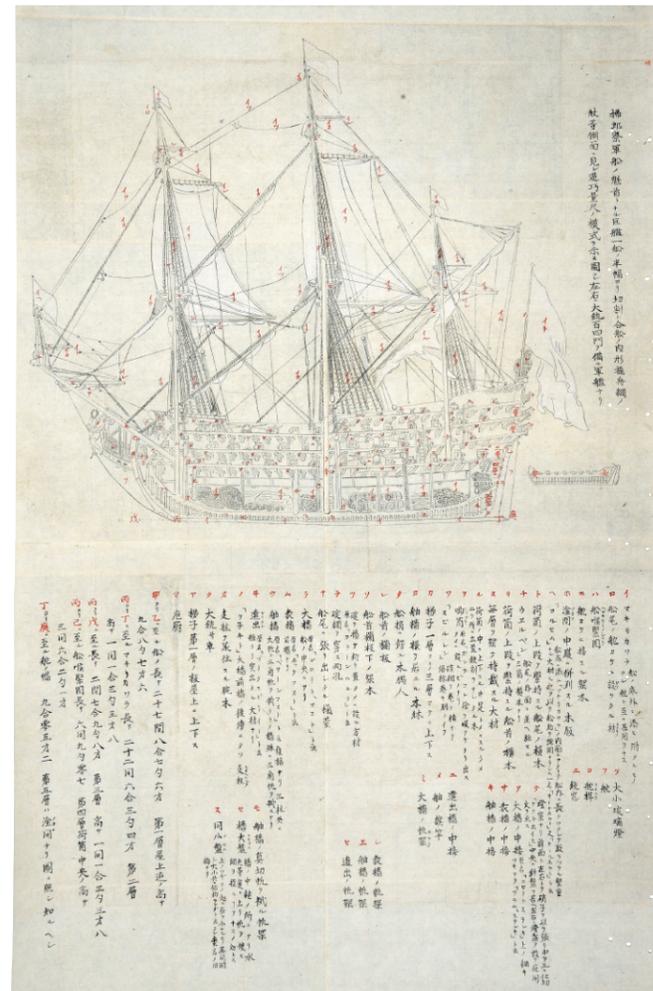
いわゆる「日米和親条約」の和解。条約12か条は、3月3日に横浜で林大学頭ほかとペリーの間で取り交わされ、5月22日には13か条の条約附録が下田で取り交わされた。この2つの文書を12月に阿部伊勢守をはじめとした老中が「大君(将軍)の命を以て」承認した。



11 魯西亜條約

安政元年12月21日(1655年2月7日) S6-311 1冊 26.5×19.0

いわゆる「日露和親条約」の和解。下田においてロシア使節プチャーチンと幕府全権筒井政憲・川路聖謨との間で結ばれた。第2条で懸案の領土問題を取り上げ、エトロフ島までが日本領、ウルップ島より北のクリル島(千島諸島)はロシア領とし、カラフトは境界を設けないと決めている。その後明治8年(1875)の樺太・千島交換条約によって、日本はウルップ以北の北千島を含む千島列島を領有する代わりに、樺太に関する権利を放棄した。



12 西洋軍艦図解

T13-98 1巻 51.6×331.7

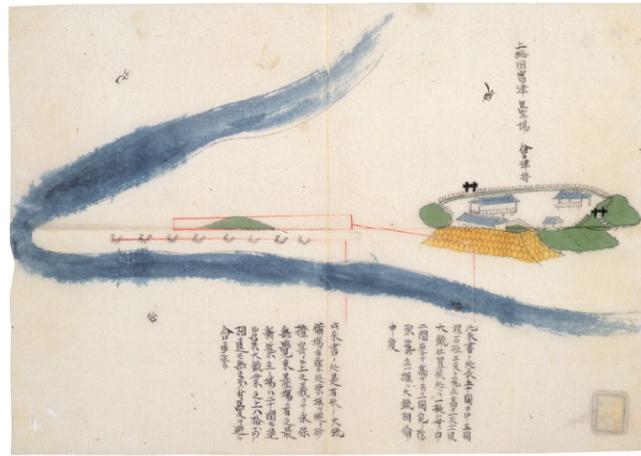
題箋に「西洋軍艦図解 全」とある。巻頭の「考例」によれば、オランダ「ユトレクト」の「コルチリス・キリツヘル」という書店が出版した「軍艦新鑄全図」という図巻を、「正栄」なる人物が翻訳したもの。西洋軍艦の構造や部材・器具などについて詳細に図解している。西洋軍艦に対する当時の人々の熱い視線が感じられる。写真は上下を変えて掲示している。



13 〔西洋船図巻〕 T13-138 1巻 26.3×491.0

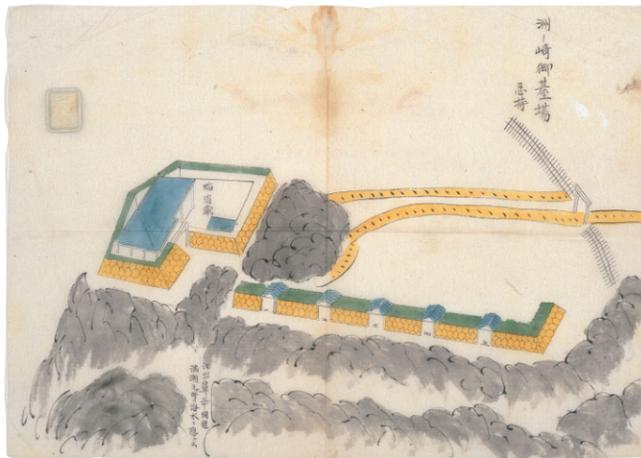
日本に渡来した西洋船の図像を貼り合わせて卷子様に仕立てたもの。題箋がはがれていて表題は不明。内訳は、「紅毛銅板蒸気船図」「紅毛船長崎入津図」「弘化二乙巳年三月渡来北亞墨利加婿玉爾掘船図」「同三丙午年閏五月渡来同所撲斯東軍艦図」「嘉永二己酉年閏四月渡来英吉利小軍艦図」「嘉永六癸丑年六月三日渡来北亞墨利加華盛頓火輪船図」「同年七月十八日長崎渡来魯西亜船図」「同火輪船図」の8枚。巻末に武器類の図像も載せている。

(2) 房総警備



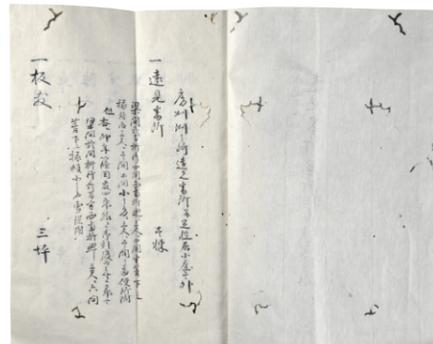
14 上総国富津台場図
〔嘉永6年(1853)〕
T12-59 1枚 27.4×38.6

会津藩受け持ちの富津台場の図。大銃備場について注記されている。岡山藩への引き渡しに際して描かれたものか。



15 洲ノ崎台場図
〔嘉永6年(1853)〕
T12-69 1枚 27.2×38.5

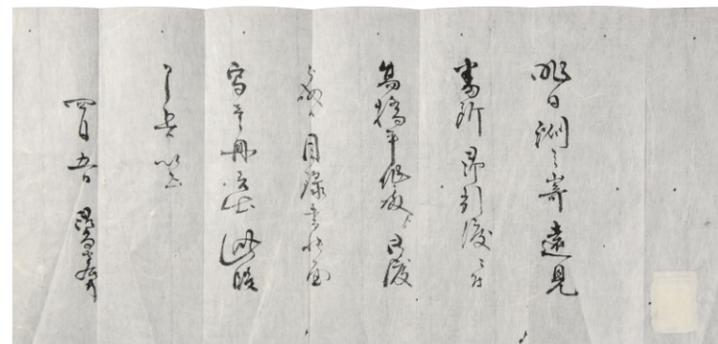
忍藩受け持ちの洲之崎台場の図。砲門に一から五まで数字が打たれ、出鼻の水位について注記がある。岡山藩への引き渡しに際して描かれたものか。



16-1

16 安房国安房郡洲之崎村内遠見番所箇所附御引渡目録 H6-107 1冊1通

房総警備にあたって、それまで洲之崎村陣屋を預かっていた松平下総守(忍藩)家臣野瀬文内から渡された遠見番所などについての目録(16-1)。江戸留守居の用状(16-2)が添えられている。2点が包紙で包まれたうえに袋に入れている。



16-2

16-1 引渡目録
嘉永7年(1854)4月 H6-107-1
1冊 27.6×20.2

16-2 〔岡山藩江戸留守居用状〕
〔嘉永7年(1854)4月5日〕 H6-107-2
1通 16.2×37.1



17 安房国平郡・安房郡・朝夷郡・上総国天羽郡郷村高帳写 松平内蔵頭御預所
嘉永6年(1853)12月 S4-296 1冊 27.0×18.3

房総警備にあたって、98か村・計2万9912石7斗3升3合8勺の幕府領が岡山藩の預所となった。その宛行状の写し。本紙は「奉書堅紙」とある。

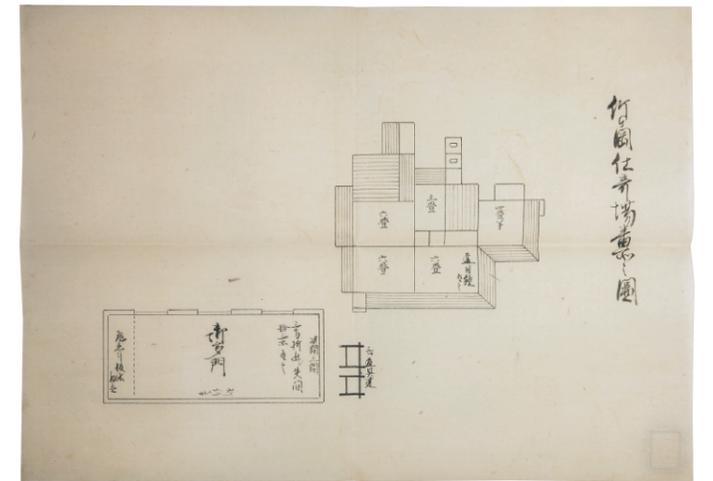


18 安政元寅年房総御備場御引渡之節諸留
H6-10~20 2袋9冊

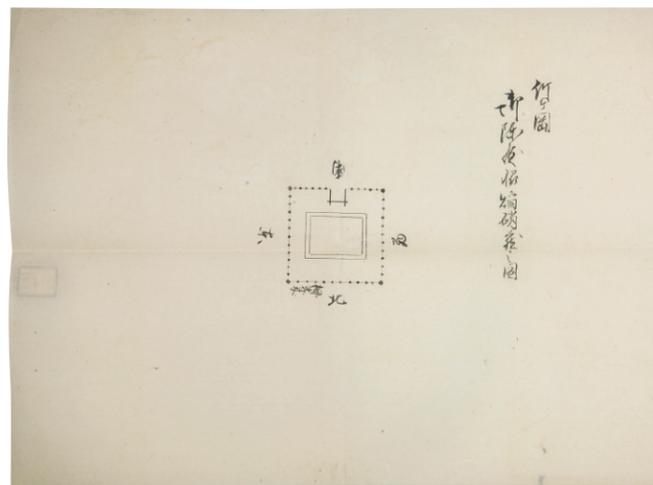
畳紙に「御留方」と書かれ、貼紙には「安政元寅年 房総御備場御引渡之節諸留 九冊(朱書)「証四号 四十四番」と記されている。

19 竹ヶ岡御陣屋其外建物共絵図
〔安政元年(1854)カ〕 H6-20

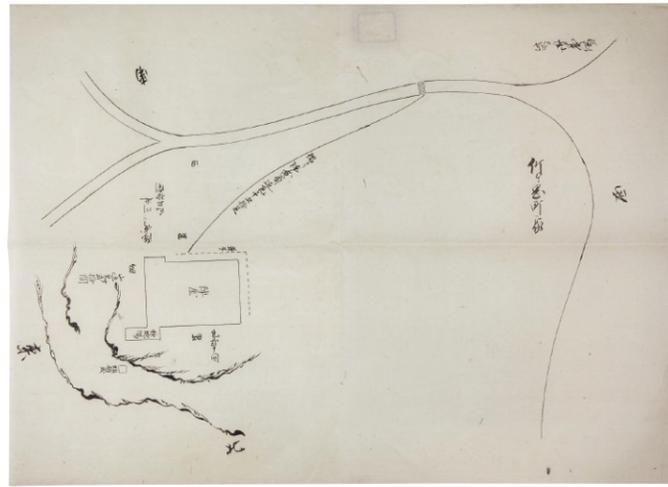
18の畳紙に入れられており、前任の会津藩から引き継いだものと思われる。5枚の絵図(19-1~5)が一緒に袋に入れられている。



19-1 竹ヶ岡仕寄場番所之図
H6-20-1 1枚 27.6×38.4



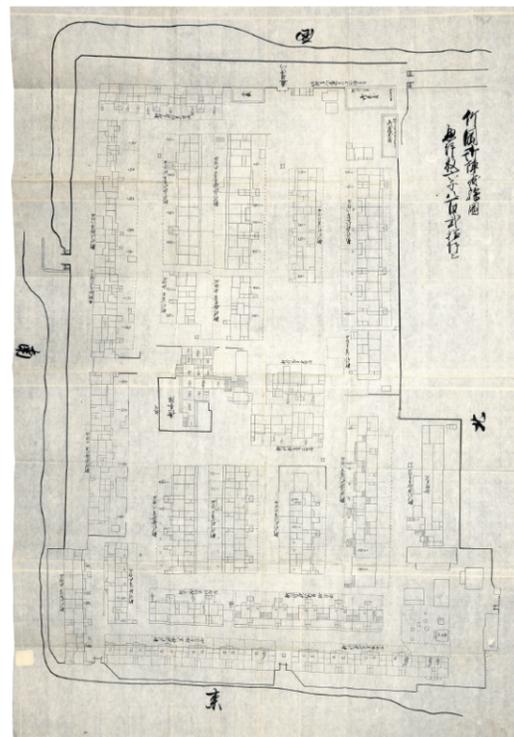
19-2 竹ヶ岡御陣屋脇硝蔵之図
H6-20-2 1枚 27.6×38.4



19-3
〔竹ヶ岡陣屋見取絵図〕
H6-20-3 1枚 27.6×38.4



19-4
上総国竹ヶ岡御台場之図
H6-20-4 1枚 54.0×78.6

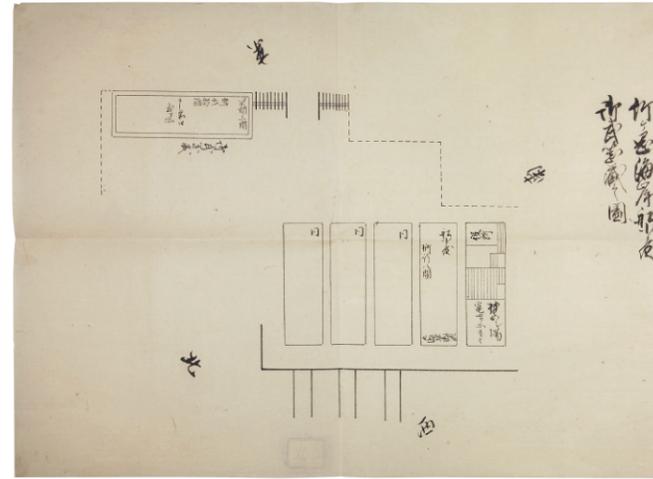


19-5
竹ヶ岡御陣屋絵図
H6-20-5 1枚 108.5×72.4

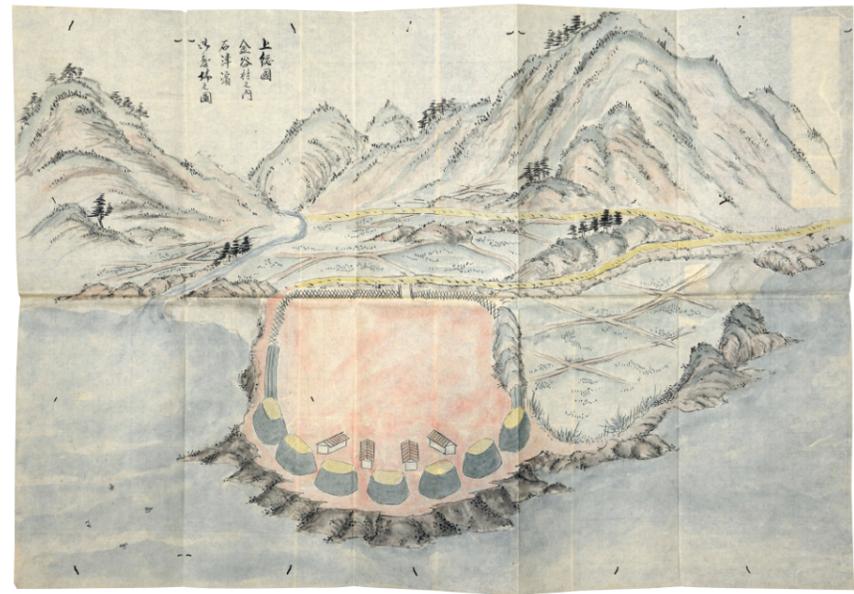
20 竹ヶ岡石津浜御台場建物共絵図

〔安政元年(1854)カ〕 H6-19

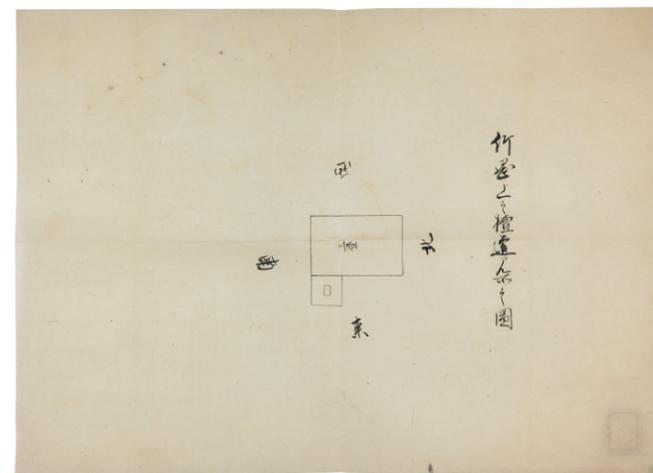
18の畳紙に入れられており、前任の会津藩から引き継いだものと思われる。4枚の絵図(20-1～4)が一緒に袋に入れられている。



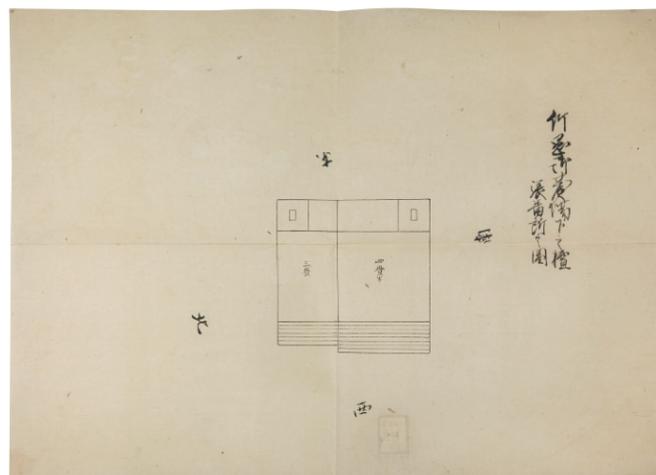
20-1
竹ヶ岡海岸船小屋御武器蔵之図
H6-19-1 1枚 27.6×38.4



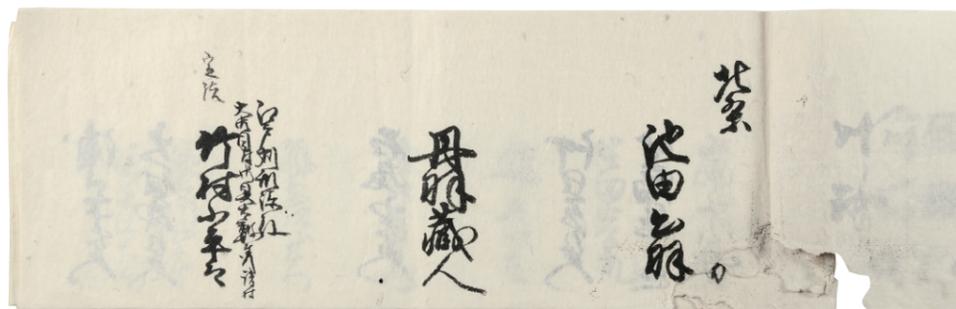
20-2
上総国金谷村之内石津浜御台場之図
H6-19-2 1枚 54.0×78.6



20-3
竹ヶ岡上之櫓遠見所之図
H6-19-3 1枚 27.6×38.4

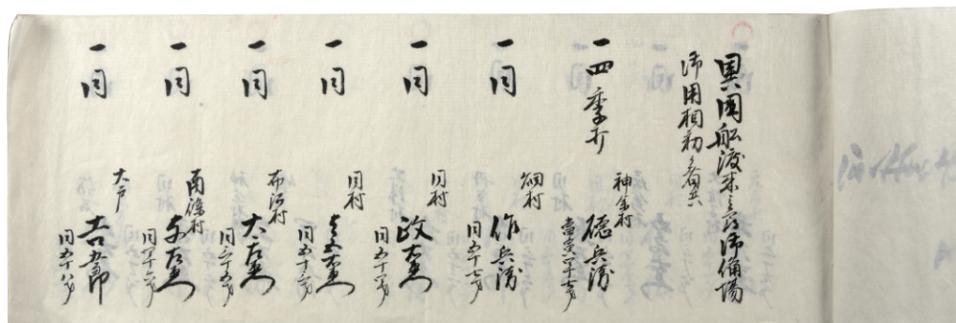


20-4
竹岡御台場下之檀張番所之図
H6-19-4 1枚 27.6×38.4



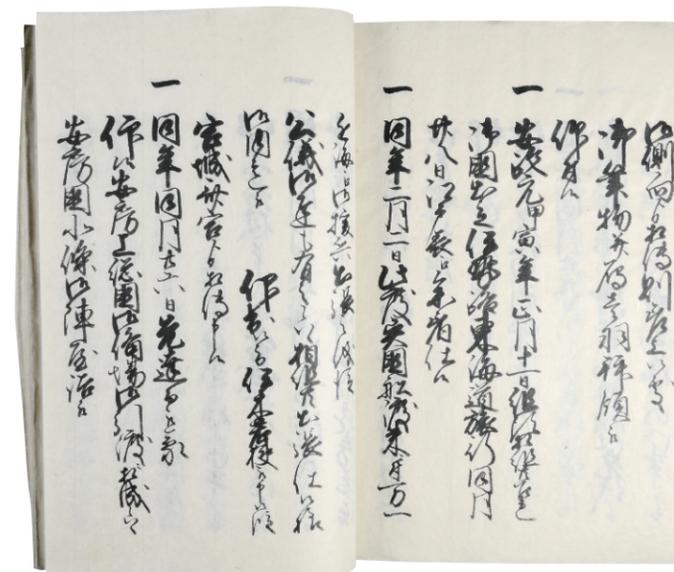
21 安房国北条・上総国竹ヶ岡両御陣屋詰
安政2年(1855) H6-90 1冊 33.4×12.3

安政2年時点で房総警備に出張していた藩士名を書き上げた帳面。北条の陣屋には総責任者の家老池田出羽が詰め、大房台場は番頭丹羽広人(蔵人)が、竹ヶ岡台場は番頭瀧川縫殿がそれぞれ責任者であった。



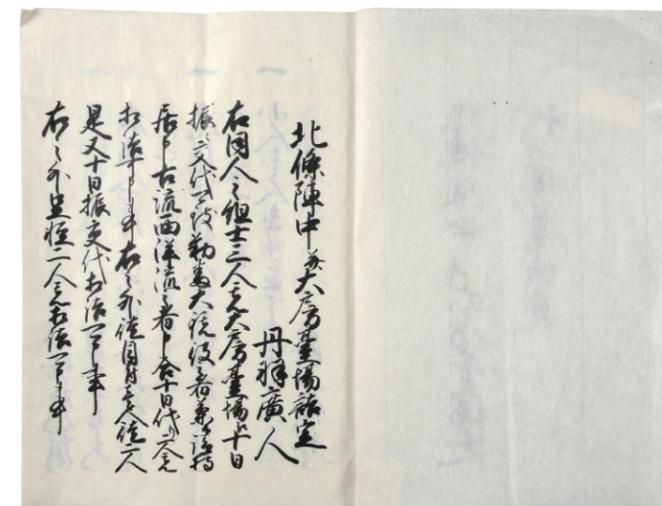
22 四季打鉄砲御備場御用相勤候者共人数取調帳
嘉永7年(1854)8月 H6-91 1冊 39.2×14.0

房総警備にあたっては、陣屋警備のために預所の村々から「四季打鉄砲」(獵師鉄砲)の者が徴発された。本帳によれば、神余村徳兵衛はじめ50人の者が書き上げられている。



23 丹羽寛夫奉公書 D3-1959 1冊 28.1×19.8

丹羽家は尾張国の出身で、勝入(池田恒興)以来の家臣として代々番頭を務めた。丹羽広人は初め虎吉と称し、天保7年(1836)8月父登の跡目知行2000石を相続した。小仕置・郡代などを勤めた後、嘉永6年(1853)12月房総警備のため江戸出府を命じられた。



24 北條陣中并大房台場定・竹ヶ岡台場定
H6-109・110 1冊 28.1×19.8

房総警備にあたって、台場の詰番勤務などについて定めたもの。例えば大房台場へは、丹羽広人の組土3人が10日交替で勤務し、ほかに古流・西洋流の大銃役2人、徒目付2人・徒2人・足軽2人が詰めるよう定められている。組ごとに配られたのか、同じ帳面が数冊残されている。

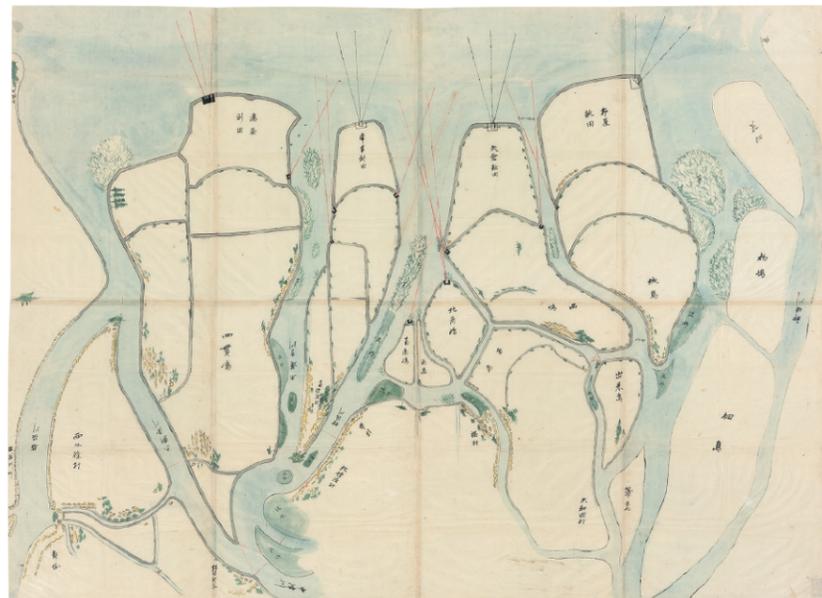
(3) 摂海警衛

25 摂海御警備場所并御台場御絵図入 T2-104

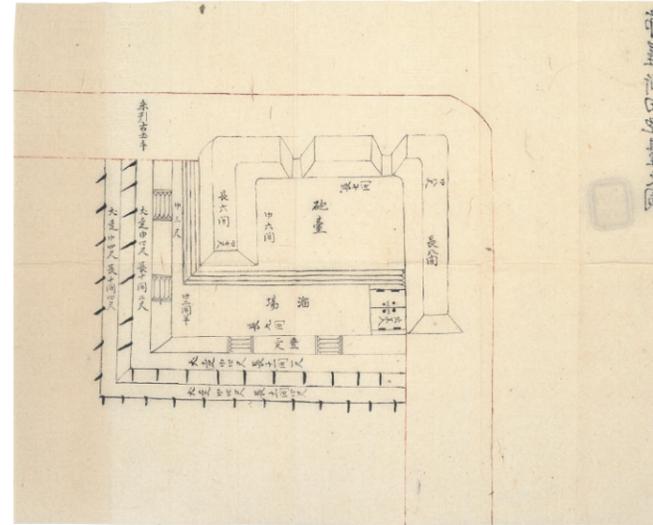
摂海警衛関係の絵図15枚・書付11通が1袋に入られている。



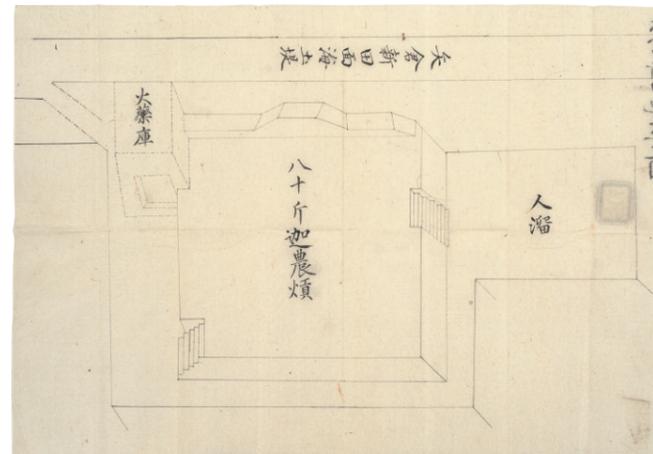
25-1 〔摂海警衛之図〕 T12-104-1 1枚 54.8×109.6



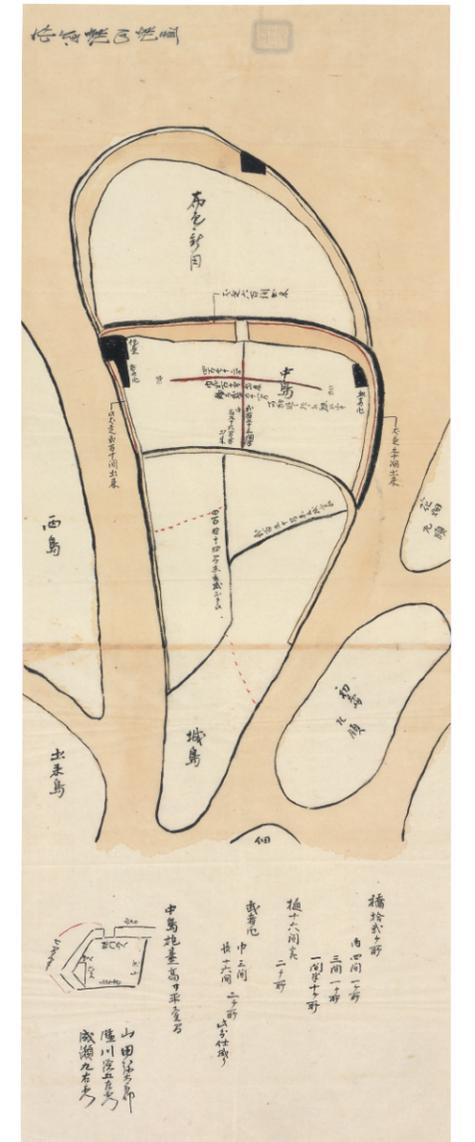
25-2 〔摂海警備台場見立絵図〕 T12-104-2 1枚 78.8×108.4



25-3 布屋新田砲台之図 T12-104-6 1枚 28.0×40.2



25-4 矢倉新田砲台之図 T12-104-7 1枚 27.7×40.7

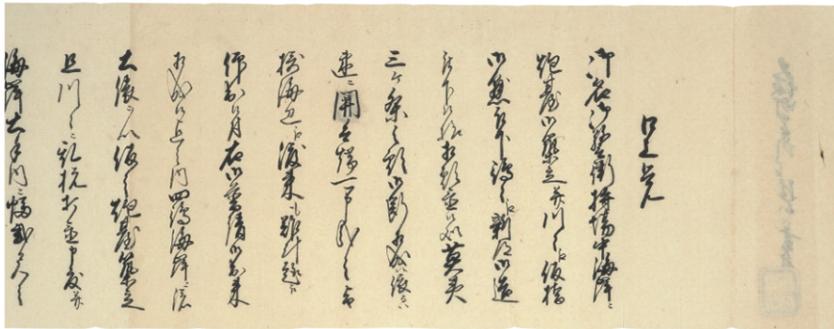


25-5 〔布屋新田新道之図〕
T12-104-10 1枚 73.0×27.4



25-6
御国御下知之上小笠原図
書頭殿江指出候書付写

年未詳2月 T12-104-12
1通 17.6×72.1
持ち場への仮橋・道路の普請について、国元からの指示に基づいて岡山藩大坂留守居の千田金右衛門が若年寄の小笠原図書頭(長行)へ願ひ出た口上覚。



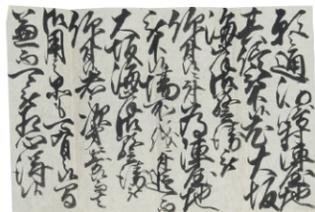
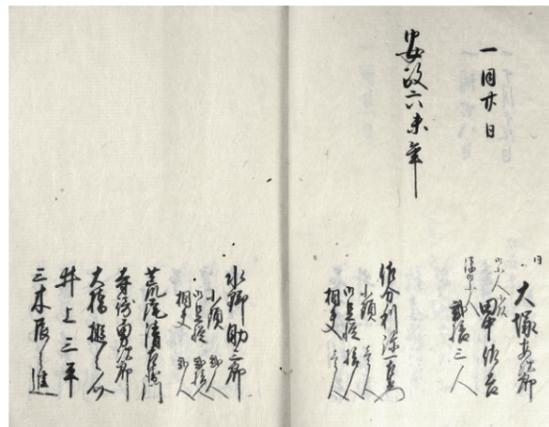
25-7
大坂町御奉行江指出候書付写

年未詳3月 T12-104-13
1通 17.6×83.9
砲台普請が完成するまで、海岸に仮の砲台を築き、川には乱杭を打ち、土手内に犬走を付けたいとの願ひ。大坂留守居千田金右衛門が差し出した。

26 安政五戊午年ヨリ大坂御警衛詰交代録

S4-397 1冊 24.4×17.2

岡山藩大坂留守居の千田金右衛門が記したもの。安政5年(1858)から文久元年(1861)までの陣屋詰め家臣の交替が記されている。



27 大坂御陣屋地其假御拝領被成度願ひ御書面二御本書

[文久3年(1863)カ]
H6-23 1通 17.1×192.0

文久3年(1863)岡山藩は摂海警衛の任を解かれ、備中沖・塩飽海警備に所替えとなった。このとき藩では西成郡川崎村の陣屋を引き続き拝領できるように歎願した。緊急の公武の御用上坂・下坂するときには天満などの蔵屋敷は手狭であるので宿陣できないこと、西宮あたりは大坂の陣で先祖の利隆が宿陣した由緒ある地であることを理由にあげている。末尾の付紙で、願ひの通りそのまま下されることとなった。

(4)瀬戸内警備と御台場



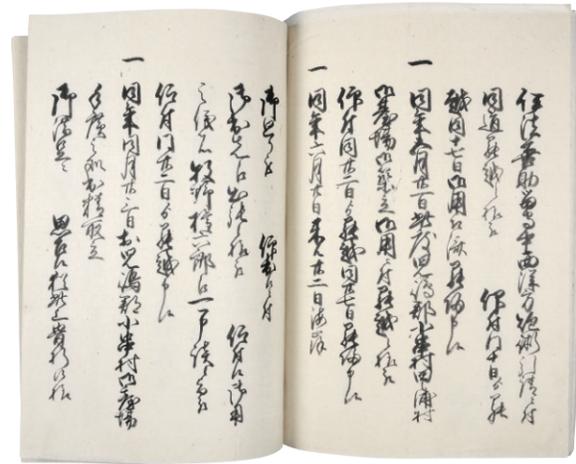
28 瀬戸内海図 T12-72 1枚 86.2×192.2

小豆島から鞆津沖までの瀬戸内海の島々を細かく描くとともに、航路や里程も細かく記している。瀬戸内海警備のために作られた絵図と思われる。「御台場并嶋浦絵図面数々入」と書かれた袋に入れられている。



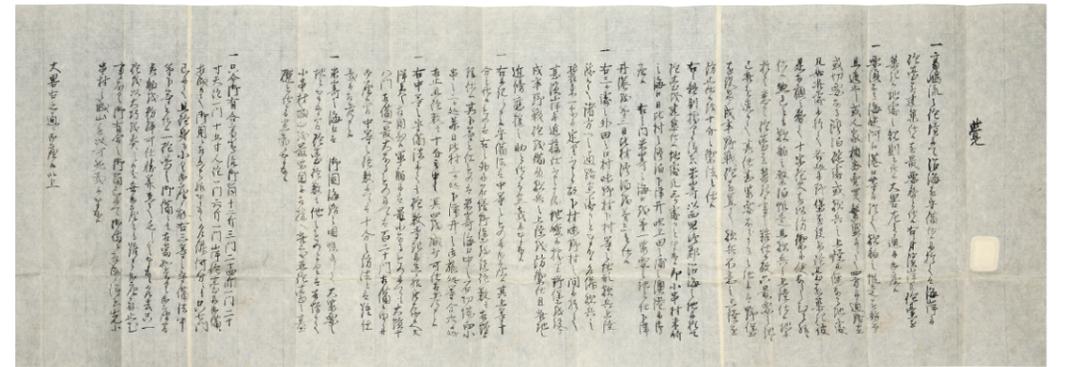
29 備中沖塩飽海図 T12-71 1枚 75.0×85.3

備中沖・塩飽海の島々を描き、その里程を記した絵図。28「瀬戸内海図」とあわせて海上警備のために作られたか。「御台場并嶋浦絵図面数々入」と書かれた袋に入れられている。



30 谷田甚太郎奉公書
D3-1490 1冊 28.3×20.4

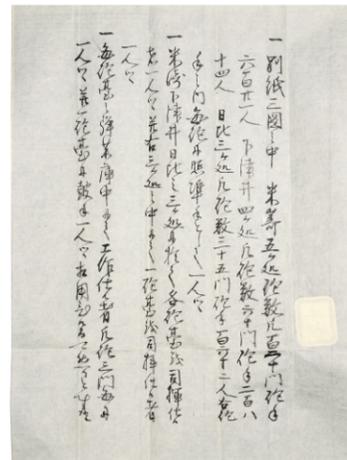
谷田家は近江国犬上郡の出身。初め山崎甲斐守に仕えたが後に浪人し、寛文4年(1664)8月弥五右衛門が土鉄砲として池田家に召し出された。甚太郎は初め清之介と称し、池田信濃守家臣塩田善三郎の次男であったが、谷田来右衛門の養子となり、弘化2年(1845)10月に家督を相続して50俵4人扶持を与えられている。房総警備に出張した後、文久3年(1863)からは砲台建設や大砲隊の組織化などに活躍した。



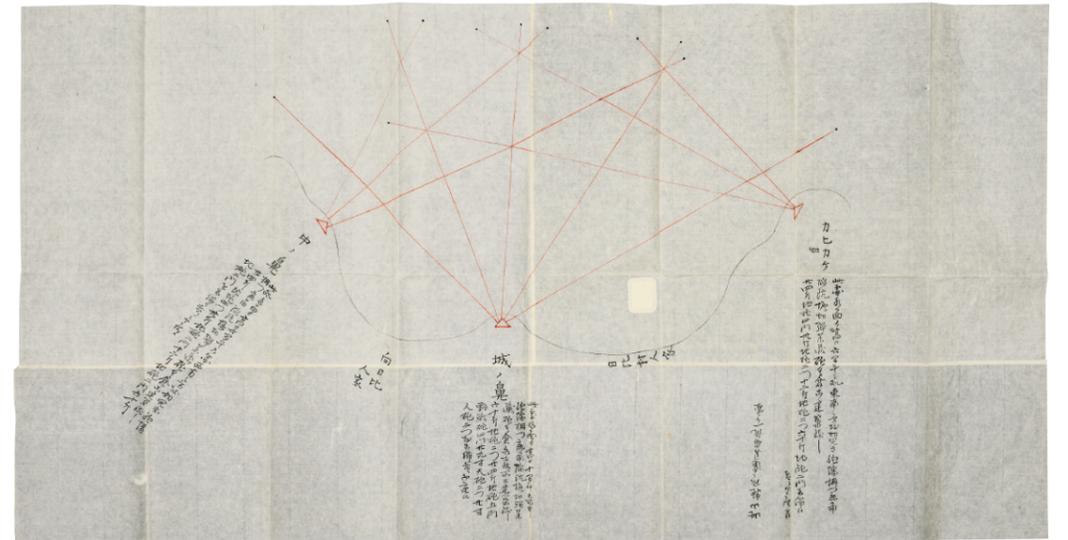
31-3 〔谷田甚太郎覚書〕 H5-85-3 1通 28.0×84.2

31 〔谷田甚太郎砲台目論見覚書并絵図〕
H6-85 2通3枚

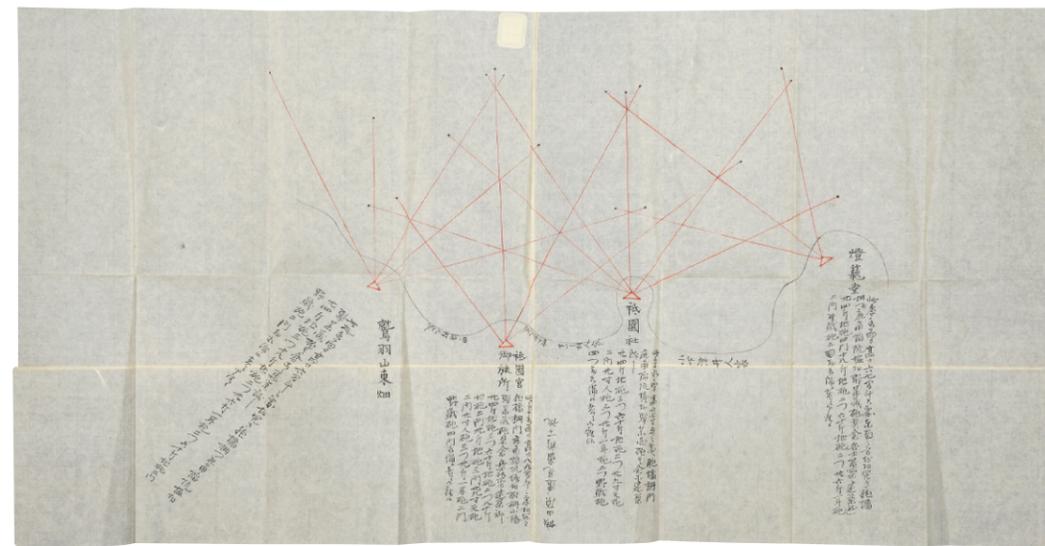
文久3年(1863)3月に児島郡を巡回して、砲台場建設の見分を行った際の書類か。包紙入。「要須なる海峡・河口・湊口等において」敵船の帆走・攻撃を防ぐために、小串村米崎・下津井村・日比村の3か所に砲台場を築くことを「最要」と提言する。とりわけ米崎は「第一緊要之地」であるから、岡山藩が所有する高島流の大砲7門すべてをここに配備することを説いている(31-3)。また、3か所の砲台場に必要の人員は、米崎5か所砲数凡120門・砲手621人、下津井4か所凡砲数60門・砲手284人、日比3か所凡砲数35門・砲手162人、3か所の砲台場に指揮官1人ずつ、各砲1門に指揮者1人・鼓手1人ずつ、凡3門に工作者1人ずつ、と見積もっている(31-2)。



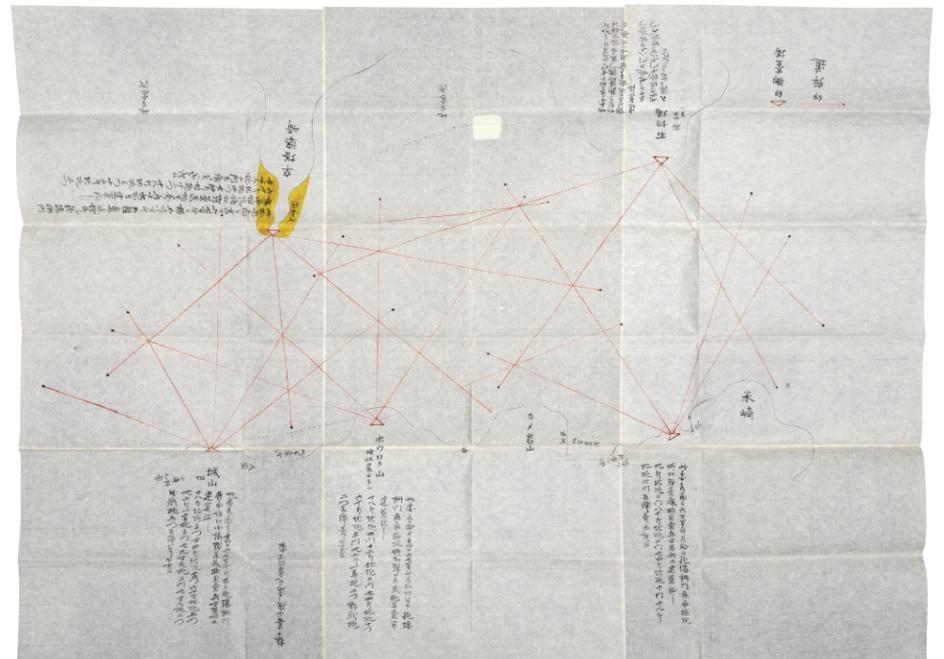
31-2 〔谷田甚太郎添書〕
H6-85-2 1通 23.1×19.1



31-4 〔日比砲台目論見絵図〕 H5-85-4 1枚 41.2×81.0



31-1 〔下津井砲台目論見絵図〕 H6-85-1 1枚 41.2×81.0



31-5 〔小串・外輪崎砲台目論見絵図〕 H6-85-5 1枚 61.0×82.6



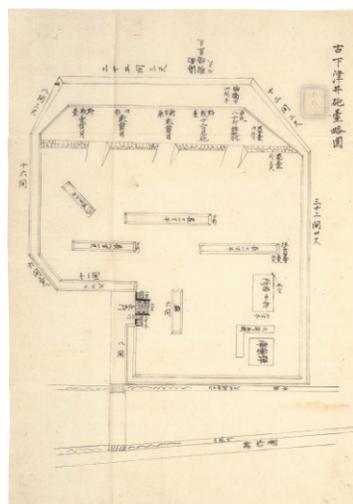
32 牛窓沖見渡絵図 T12-74 1枚 112.0×157.5

牛窓に砲台設置を計画した絵図。五香宮および大端に砲台を設けた場合、西は端小島から鹿忍見通しまで、東は前島の網代崎から蕪崎見通しまでが射程となることを、細い朱線で示しており、この2か所の砲台が「牛窓守衛挑戦之要地」と記されている。また、前島と小豆島の間を通行する異国船に対しては、前島に砲台を築いても全く効果がないとも記されている。結局牛窓に砲台を設けることはなかったようだ。28・29と同じ「御台場并嶋浦絵図面数々入」と書かれた袋に入れられている。

33 御台場三ヶ所図面 T12-61~63 3枚

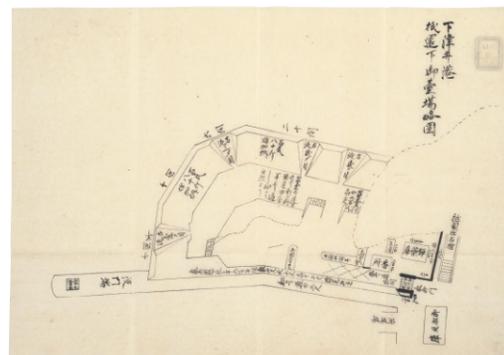
3枚の台場図が帯封でまとめられ、帯紙に「御台場三ヶ所図面」と上書されている。谷田甚太郎らが作成したものと思われる。

33-1
古下津井砲台略図
T12-61 1枚 39.6×27.6



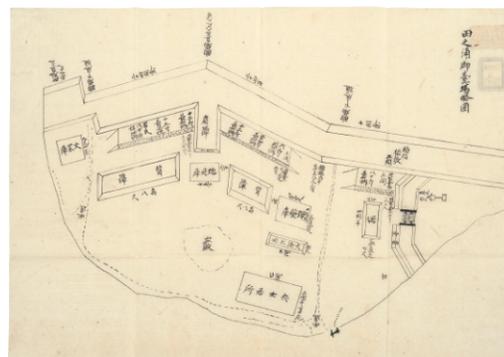
33-1

33-2
下津井港祇園下御台場略図
T12-63 1枚 27.6×39.6



33-2

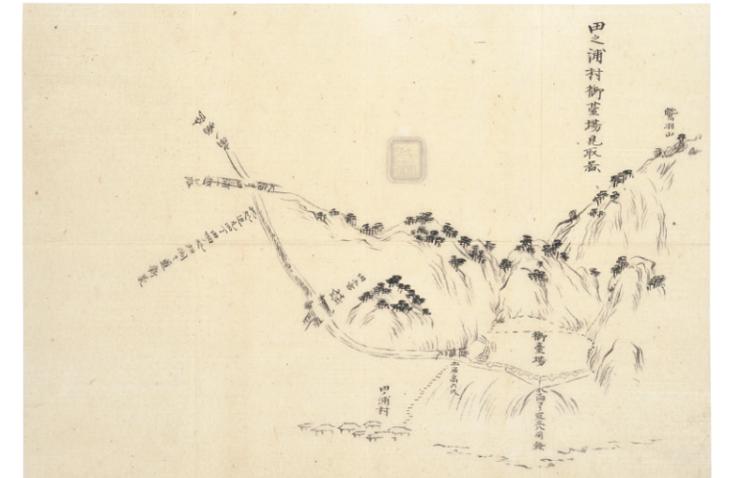
33-3
田之浦御台場略図
T12-62 1枚 27.6×39.6



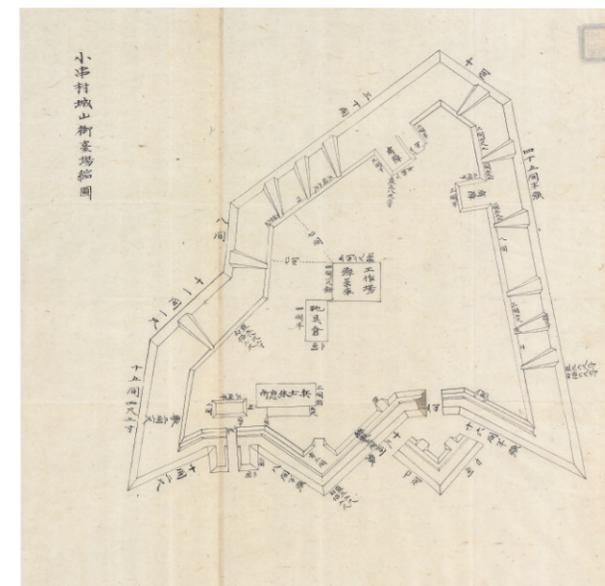
33-3

34 〔台場見取絵図〕 T12-106

「上」と上書きした包紙に4枚の絵図が包まれている。田之浦村と小串村の台場について見取図と縮図1枚ずつである。谷田甚太郎らが作成したものと思われる。



34-1 田之浦村御台場見取図 T12-106-4 1枚 28.3×40.9

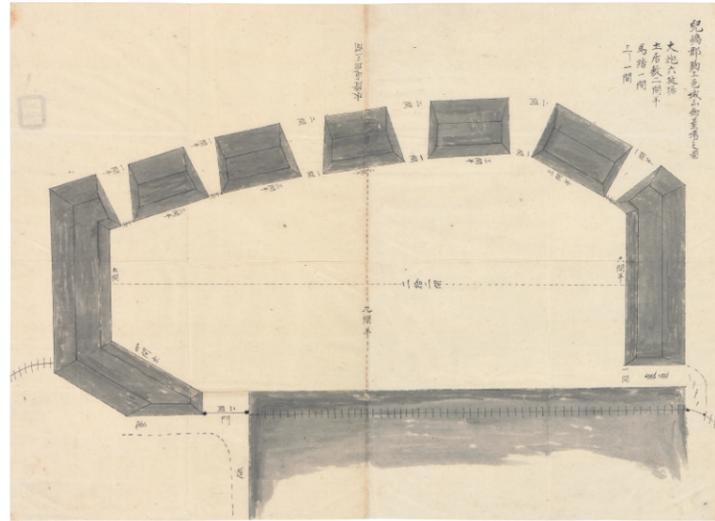


34-2 小串村城山御台場縮図
T12-106-1 1枚 40.4×42.0

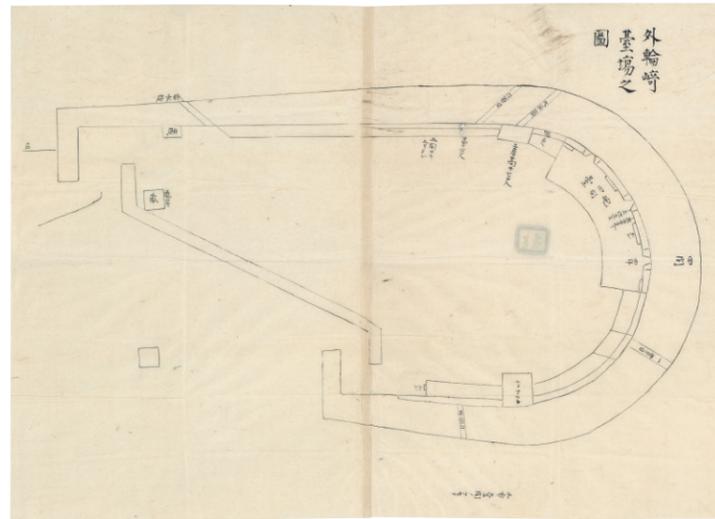


34-3 城山御台場見取絵図 T12-106-3 1枚 28.4×40.8

35 〔台場絵図〕 T12-107 7枚
1袋に7枚の台場絵図が入られている。
うち2枚を展示した。

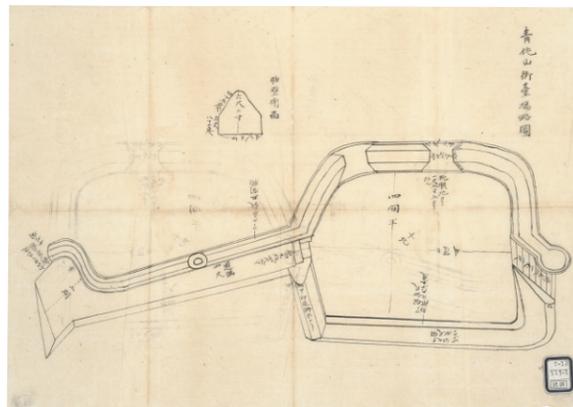


35-1
児嶋郡胸上邑城山御台場之図
T12-107-4 1枚 40.5×56.2

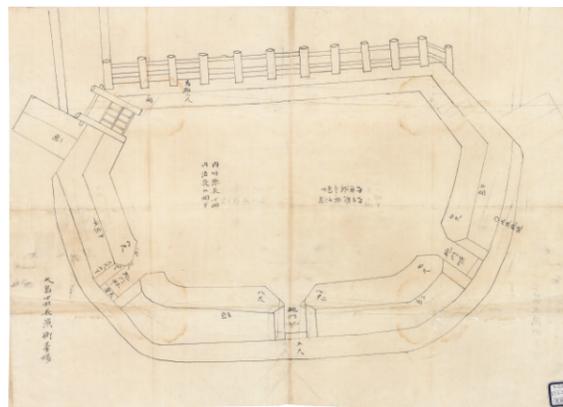


35-2
外輪崎台場之図
T12-107-5 1枚 40.0×55.6

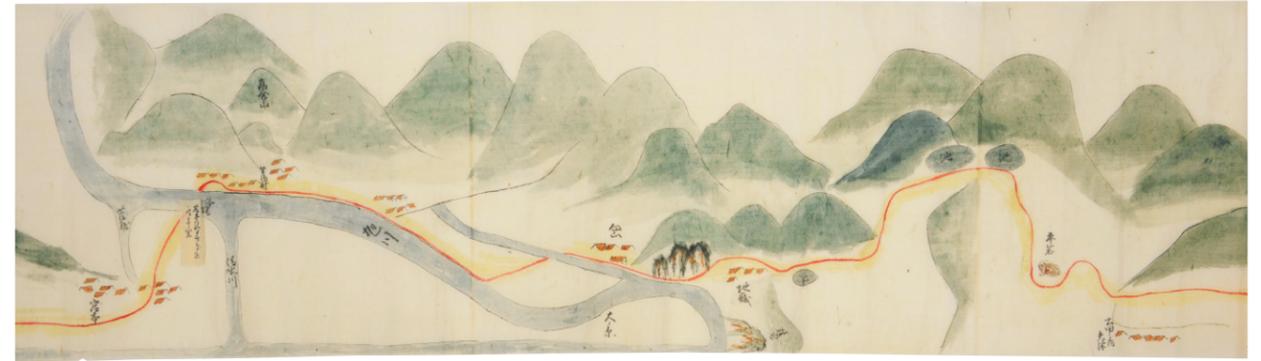
36 〔鴨方領台場絵図〕 T12-113 2枚
鴨方藩でも海辺警備のため砲台場を築いた。
その関係図2枚が一緒に包紙に包まれている。



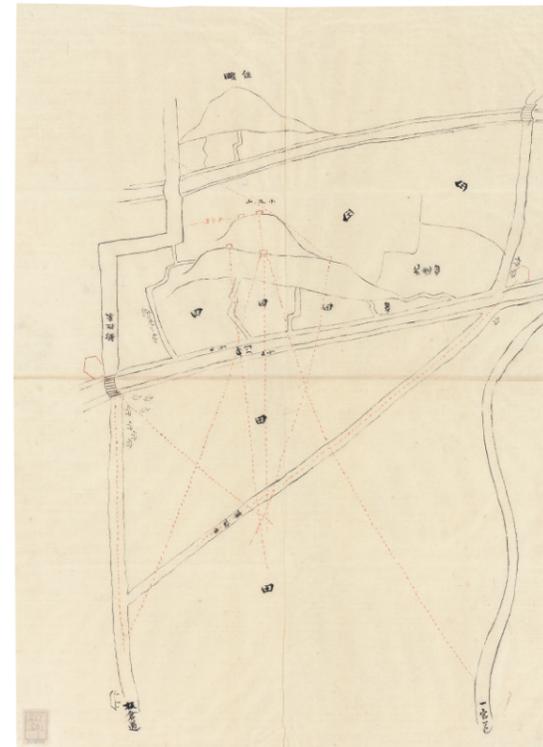
36-1 青佐山御台場略図
T12-113-1 1枚 28.0×39.9



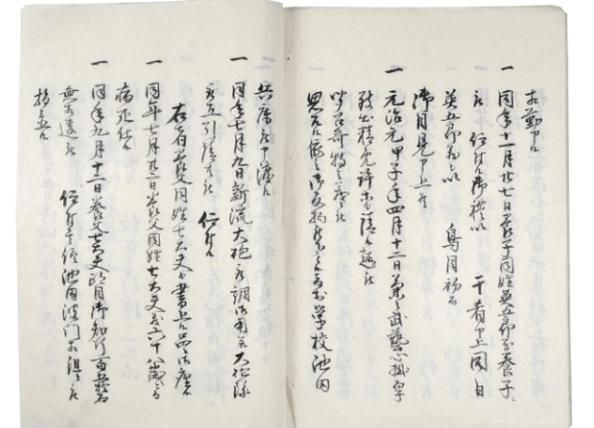
36-2 大島中村長浜御台場図
T12-113-2 1枚 29.7×55.6



37 御目論見新道見取凡絵図 文久3年(1863) N1-133 1巻 27.9×360.6
文久3年(1863)11月岡山藩は中国路の付け替えを幕府に願い出た。その願書に付けられた付け替え目論見絵図。新道筋は黄色で示されている。藤井宿から北上し、牟佐で大川(旭川)を渡り、ほぼ古代の山陽道に沿って西辛川に至る道筋であった。

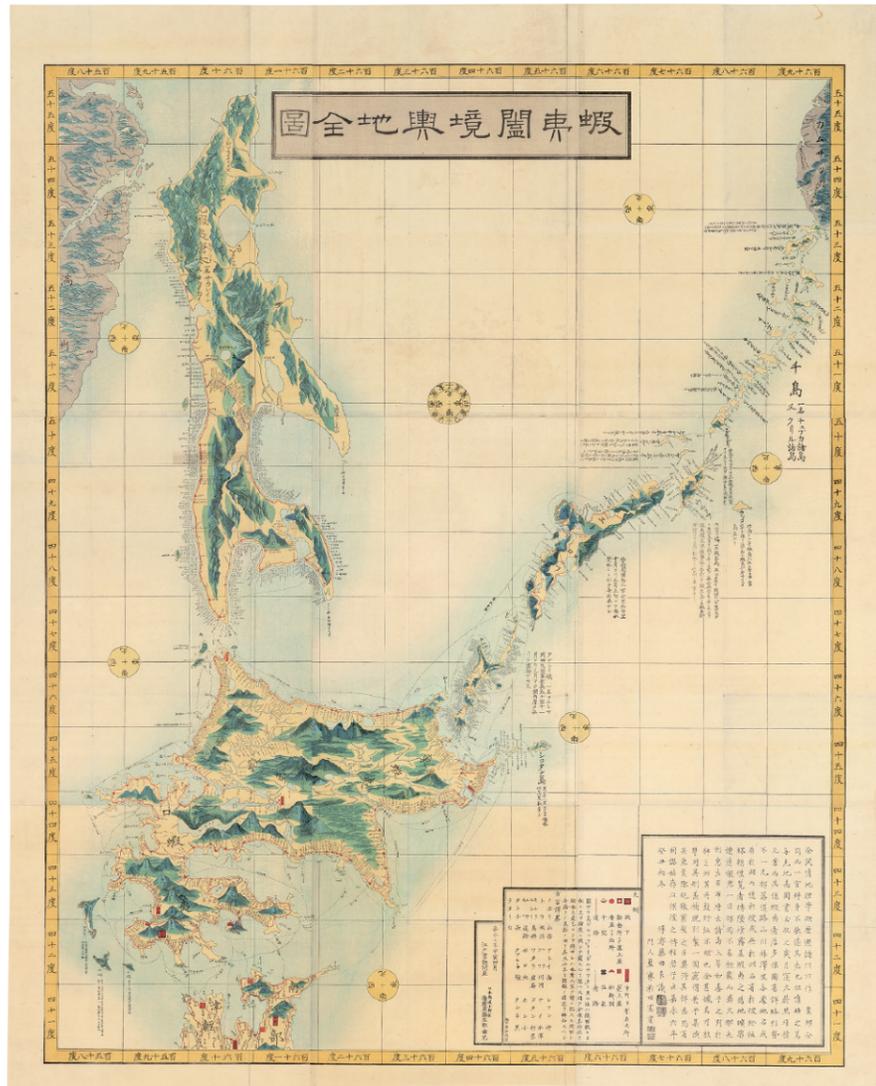


38 辛川村小丸山砲台見込図
T12-102-1 1枚 55.5×40.5
小丸山に砲台を築いた場合、新街道および古街道への射程を朱点線で示している。小丸山は現在岡山市立中山中学校の敷地内にある古墳。実際に砲台が築かれた確証はないが、陸上でも領境防備が話題になったことを示す史料である。



39 香川真一奉公書 D3-784 1冊 28.3×20.6
香川家は三河国吉田の出身、輝政の代に池田家に召し出された。その後は知行150石で代官などを務めている。香川英五郎(のち真一)は岡長左衛門の次男であったが、文久2年(1862)12月に香川七大夫の養子となり、元治元年(1864)12月に跡目知行150石を相続している。明治以降も政治家・実業家として活躍した。

(5) 広がる世界



40 蝦夷地境輿地全図

嘉永7年(1854)4月 T10-26 1枚 123.0×99.7

藤田良(惇齋)が作成した木版多色刷り大判の北辺図。19世紀初頭に幕府が作成した蝦夷地測量図を基にしているが、山々を絵画的に描くなど鑑賞と実用を兼ねた絵図である。経緯線を方眼に引くが、正確なものではない。藤田の識語は嘉永6年(1853)10月で「日露和親条約」締結以前。発行は江戸日本橋通十軒店の書物問屋播磨屋勝五郎。



41 新刊輿地全図 文久元年(1861)11月 T10-12 1枚 136.4×135.9

佐藤政養が作成した木版大判の方形世界図。表紙および箱の外題は「官許新刊輿地全図」。政養は出羽国庄内藩士。勝海舟に師事し、後に幕府海軍操練所の蘭書翻訳方を務めた。その公務としてオランダ製の地図を翻訳して作成したのが本図で、世界の海域や航路についての情報が所狭しと書き込まれている。上部題額のなかに日の丸を「大日本国旗」として掲げ、図面の周囲に世界各国の国旗をめぐる。下部の欄外には、世界諸州の面積や人口をはじめ、さまざまな地理学上の情報が書き上げられている。川勝義邦の題言は文久元年11月、発行は江戸横川三之橋老皂館万屋兵四郎。

出展資料目録

番号	資料名	頁数	年代	法量	整理番号
1	修史草按・史料草按 全20巻／ 維新前目次1冊			24.1×16.5	A7-1～21
2	高島砲術調練之図	1枚		105.5×159.2	T12-117
3	嘉永6年留帳・上	1冊	嘉永6年(1853)	26.8×19.3	A1-304
4	野田久磨奉公書	1冊		27.8×20.0	D3-2002
5	北亞米利加水師提督ペルリ上陸之図	1冊		19.0×13.4	P21-67
6	浦賀図	1枚	[嘉永6年(1853)カ]	39.8×28.5	T12-22
7-1	合衆国伯理璽天德書簡和解	1冊	[嘉永6年(1853)7月]	26.2×19.7	S1-49-1
7-2	[阿部伊勢守演達書写]	2通	[嘉永6年(1853)7月]	16.4×61.4 16.4×31.4	S1-49-6
8-1	書上 松平内蔵頭	1冊	嘉永6年(1853)8月	26.7×19.4	S3-17-1
8-2	副啓 松平内蔵頭	1通	[嘉永6年(1853)8月10日]	18.2×107.1	S3-17-2
9	長崎表魯西亜船風説書	1冊	[嘉永6年(1853)]	28.0×20.4	S1-46
10	亜墨利加約條	1冊	安政元年12月	26.7×19.4	S6-315
11	魯西亜條約	1冊	安政元年12月21日 (1655年2月7日)	26.5×19.0	S6-311
12	西洋軍艦図解	1巻		51.6×331.7	T13-98
13	[西洋船図巻]	1巻		26.3×491.0	T13-138
14	上総国富津台場図	1枚	[嘉永6年(1853)]	27.4×38.6	T12-59
15	洲ノ崎台場図	1枚	[嘉永6年(1853)]	27.2×38.5	T12-69
16	安房国安房郡洲之崎村内遠見番所箇所 附御引渡目録	1冊1通			H6-107
16-1	引渡目録	1冊	嘉永7年(1854)4月	27.6×20.2	H6-107-1
16-2	[岡山藩江戸留守居用状]	1通	嘉永7年(1854)4月5日	16.2×37.1	H6-107-2
17	安房国平郡・安房郡・朝夷郡・上総国天 羽郡郷村高帳写 松平内蔵頭御預所	1冊	嘉永6年(1853)12月	27.0×18.3	S4-296
18	安政元寅年房総御備場御引渡之節諸留	2袋9冊			H6-10～20
19	竹ヶ岡御陣屋其外建物共絵図		[安政元年(1854)カ]		H6-20
19-1	竹ヶ岡仕寄場番所之図	1枚		27.6×38.4	H6-20-1
19-2	竹ヶ岡御陣屋脇焔硝藏之図	1枚		27.6×38.4	H6-20-2
19-3	[竹ヶ岡陣屋見取絵図]	1枚		27.6×38.4	H6-20-3
19-4	上総国竹ヶ岡御台場之図	1枚		54.0×78.6	H6-20-4
19-5	竹ヶ岡御陣屋絵図	1枚		108.5×72.4	H6-20-5
20	竹ヶ岡石津浜御台場建物共絵図		[安政元年(1854)カ]		H6-19
20-1	竹ヶ岡海岸船小屋御武器藏之図	1枚		27.6×38.4	H6-19-1
20-2	上総国金谷村之内石津浜御台場之図	1枚		54.0×78.6	H6-19-2
20-3	竹岡上之檀遠見所之図	1枚		27.6×38.4	H6-19-3
20-4	竹岡御台場下之檀張番所之図	1枚		27.6×38.4	H6-19-4
21	安房国北条・上総国竹ヶ岡御陣屋詰	1冊	安政2年(1855)	33.4×12.3	H6-90
22	四季打鉄砲御備場御用相勤候者共人数 取調帳	1冊	嘉永7年(1854)8月	39.2×14.0	H6-91
23	丹羽寛夫奉公書	1冊		28.1×19.8	D3-1959
24	北條陣中并大房台場定・竹ヶ岡台場定	1冊		28.1×19.8	H6-109・110
25	摂海御警備場所并御台場御絵図入				T2-104

番号	資料名	頁数	年代	法量	整理番号
25-1	[摂海警衛之図]	1枚		54.8×109.6	T12-104-1
25-2	[摂海警備台場見立絵図]	1枚		78.8×108.4	T12-104-2
25-3	布屋新田砲台之図	1枚		28.0×40.2	T12-104-6
25-4	矢倉新田砲台之図	1枚		27.7×40.7	T12-104-7
25-5	[布屋新田新道之図]	1枚		73.0×27.4	T12-104-10
25-6	御国御下知之上小笠原図書頭殿江指出 候書付写	1通	年未詳2月	17.6×72.1	T12-104-12
25-7	大坂町御奉行江指出候書付写	1通	年未詳3月	17.6×83.9	T12-104-13
26	安政五戊午年ヨリ大坂御警衛詰交代録	1冊		24.4×17.2	S4-397
27	大坂御陣屋地其俣御拝領被成度願ひ御 書面ニ御本書	1通	[文久3年(1863)カ]	17.1×192.0	H6-23
28	瀬戸内海図	1枚		86.2×192.2	T12-72
29	備中沖塩飽海図	1枚		75.0×85.3	T12-71
30	谷田甚太郎奉公書	1冊		28.3×20.4	D3-1490
31	[谷田甚太郎砲台目論見覚書并絵図]	2通3枚			H6-85
31-1	[下津井砲台目論見絵図]	1枚		41.2×81.0	H6-85-1
31-2	[谷田甚太郎添書]	1通		23.1×19.1	H6-85-2
31-3	[谷田甚太郎覚書]	1通		28.0×84.2	H5-85-3
31-4	[日比砲台目論見絵図]	1枚		41.2×81.0	H5-85-4
31-5	[小串・外輪崎砲台目論見絵図]	1枚		61.0×82.6	H6-85-5
32	牛窓沖見渡絵図	1枚		112.0×157.5	T12-74
33	御台場三ヶ所図面	3枚			T12-61～63
33-1	古下津井砲台略図	1枚		39.6×27.6	T12-61
33-2	下津井港祇園下御台場略図	1枚		27.6×39.6	T12-63
33-3	田之浦御台場略図	1枚		27.6×39.6	T12-62
34	[台場見取絵図]				T12-106
34-1	田之浦村御台場見取図	1枚		28.3×40.9	T12-106-4
34-2	小串村城山御台場縮図	1枚		40.4×42.0	T12-106-1
34-3	城山御台場見取絵図	1枚		28.4×40.8	T12-106-3
35	[台場絵図]	7枚			T12-107
35-1	児嶋郡胸上邑城山御台場之図	1枚		40.5×56.2	T12-107-4
35-2	外輪崎台場之図	1枚		40.0×55.6	T12-107-5
36	[鴨方領台場絵図]	2枚			T12-113
36-1	青佐山御台場略図	1枚		28.0×39.9	T12-113-1
36-2	大島中村長浜御台場図	1枚		29.7×55.6	T12-113-2
37	御目論見新道見取凡絵図	1巻	文久3年(1863)	27.9×360.6	N1-133
38	辛川村小丸山砲台見込図	1枚		55.5×40.5	T12-102-1
39	香川真一奉公書	1冊		28.3×20.6	D3-784
40	蝦夷園境輿地全図	1枚	嘉永7年(1854)4月	123.0×99.7	T10-26
41	新刊輿地全図	1枚	文久元年(1861)11月	136.4×135.9	T10-12

池田家文庫絵図展

年度	展示テーマ	会期
平成9	絵図にみる岡山城	1997年10月24日～11月2日
平成10	岡山藩と海之道	1998年10月23日～11月1日
平成11	後楽園と岡山藩	1999年10月23日～11月1日
平成12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日～11月1日
平成13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日～11月1日
平成14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発(1)	2002年10月23日～11月1日
平成15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発(2)	2003年10月23日～11月1日
平成16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日～11月1日
平成17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日～10月10日
平成18	戦さと城	2006年10月26日～11月12日
平成19	陸の道	2007年11月16日～12月2日
平成20	日本と「異国」	2008年11月1日～11月16日
平成21	岡山藩の教育	2009年9月29日～10月18日
平成22	絵図にみる中国四国地方の城下町	2010年11月16日～11月28日
平成23	江戸時代の巨大手描き絵図	2011年10月22日～11月6日
平成24	日本六十余州図の世界	2012年11月10日～11月25日
平成25	開国と岡山藩	2013年11月4日～11月17日

記念講演会・パネルディスカッション

年度	記念講演会	記念講演会講師(役職は当時)	期日
平成9	絵図を読む	岡山大学文学部 教授 倉地克直	1997年10月25日
平成10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター 総括学芸員 竹林 榮一	1998年10月23日
平成11	日本庭園と後楽園	岡山大学農学部 教授 千葉喬三	1999年10月23日
平成12	江戸幕府の国絵図事業	東亜大学 教授 川村博忠	2000年10月28日
平成13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所 教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平成14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部 教授 名合宏之	2002年10月26日
平成15	近世の境界論争と裁判	東京大学史料編纂所 助教授 杉本史子	2003年10月23日
平成16	岡山城下町を掘る ～絵図と遺構～	岡山市デジタルミュージアム開設事務所 乗岡 実	2004年10月23日
平成17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部 教授 倉地克直	2005年10月1日
平成18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部 教授 高橋 修	2006年10月26日
平成19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館 館長 在間宣久	2007年11月23日
平成20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部 教授 池内 敏	2008年11月1日
平成21	儒教教育と武士の人間形成	京都大学教育学研究科 教授 辻本雅史	2009年10月3日
平成22	デジタルマップで廻る城下町	徳島大学大学院ソシオ・アーツ・サイエンス研究部 教授 平井松午	2010年11月20日
平成23	国絵図復元の成果	東京藝術大学大学院 准教授 荒井 経	2011年10月23日
平成24	徳川家光と日本	京都大学名誉教授 藤井謙治	2012年11月18日
平成25	開国と開港	東京大学史料編纂所 教授 横山伊徳	2013年11月9日

年度	パネルディスカッション	パネラー・司会	期日
平成23	国絵図復活	東京大学史料編纂所 教授 杉本史子 東京藝術大学大学院 准教授 荒井 経 電気通信大学 准教授 佐藤賢一 筑波大学大学院 博士前期課程 中村裕美子 国絵図研究会 会員 青木充子 [司会] 東京大学大学院 准教授 中村雄祐	2011年10月23日

平成25年度 企画展 池田家文庫絵図展 開国と岡山藩

発行日/平成25年11月4日 主催/岡山大学附属図書館 岡山シティミュージアム

発行/岡山大学附属図書館 〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1 印刷/株式会社中野コロタイプ